

## 第21回ワイルド学会要旨

## 講演

## ワイルドにおけるケルトの要素

—The Celtic Elements in Oscar Wilde—

井村君江

(明星大学教授)

1995年2月14日に、ウェストミンスター寺院の Poets Corner のステンドグラスに名前が入って以来、文学者として人間として、Oscar Wilde 再評価の気運がイギリスで高まってきた。15年間の構想を基に監督されたブライアン・ギルバートのワイルドの伝記映画(スティーブン・フライ主演)は完成間近であるが、*Secret Life of Wilde as Ideal Husband* (『理想の夫としての知られざるワイルドの生涯』仮題)として、これまでの homo sexuality や裁判を主として描いたものとは違い、夫として父として人間ワイルドを描こうとしている。Importance of Praising Oscar を目指したものである。いみじくも Richard Ellmann がその伝記の最後に "He belongs to our world more than to Victorian's" と言っているように、ワイルドの評価は現代の視点から行われるべきである。

これまでワイルド文学は Anglo-Irish の系列に属するものとされており、アイルランド文学史からは異端視されていたが、現在はアイルランドの要素からの見直しがなされようとしている。Richard Pine の *The Thief of Reason. Oscar Wilde and Modern Ireland* (1995) や 'Rediscovering the Irish Wilde' by Neil Sammells [in *Rediscovering Oscar Wilde* (1994) ed. by Sandulescu] 等は、ワイルドの Irishness の特色を見ようとした近著である。私が見ようとしたケルトの観点からの再評価は、こうしたアイルランド文学者として特色だけでなく、広く古代ケルト文学の特色と連関を考慮に入れて、ワイルドを新しく見ようとした試みである。「大陸のケルト」と「島のケルト」に分けた場合、アイルランドは後者に属すが、ヨーロッパではケルトの要素が現在、認め難いのに対し、アイルランドは特色あるケルトの要素を、「琥珀の中の虫」のようによく保存している。したがってアイリッシュネスには、根底にケルト民族の持つ自然観い**わば汎神論**、**物活論**、そしてドルイディズム(太陽崇拜、**靈魂不滅**、**万物流転**)の考え方が**あることは無視できない**。

Matthew Arnold のケルト文学研究 (*The Study of Celtic Literature*, 1867) とフ

ランスの Ernest Renan のケルト民族の詩の特色を説いた作品 (*La Poésie des races celtiques*, 1896), 及び W. B. Yeats の *The Celtic Element in Literature* (1903) 等が、文学にケルトの要素を見た古典として特筆すべきものである。そこから集約されてくるキーワードを、ケルトの要素を探る working Hypothesis として提示してみよう。

1. 古代への興味 [神話・伝説への志向] 語り story-telling
2. 常若の国への憧憬 [人工性・芸術, 超現実観] 若さ, 他次元への志向
3. 身体と言葉の遊び [ダンディズム, サーカズム] 仮面・ドラマ・表現
4. 知的エグザイル [アウトサイダー] 個人主義, 現実からの回避

詩人でフォークロリストの母レディ・ワイルド(エルジー)が付けた名前 Oscar Fingal O'Flahertie Willis Wilde 'Oscar' のは古代ケルトの英雄 Oisín の息子であり, 'Fingal' は Macpherson の Ossian の英雄, 'O'Flahertie' は Galway の豪族というように, ワイルドはケルトの古代英雄の映像を, 名前とともに生涯背負っていた。獄中でワイルドはこの名前と両親への敬愛とをこう回想している「母と父とは単に文学, 芸術, 考古学, および科学ばかりでなく, 国民としての進化における祖国の歴史においても, 高貴で光栄あるひとつの名前を私に譲ってくれた」。また眼科医で考古学者の父親ウィリアムの別荘の一つは, Mayo にあり神話の戦いの地 Moytura に近く, 考古学の発掘に父について行き, ケルトの発掘品に触れた経験もある。いわば Wickrow の山や Corrib の湖などアイルランドの土地・風景は, 古代の神話・伝説とともに, 生涯にわたり原風景としてワイルドの心にあった。

愛国者<sup>パトリオット</sup>であった母親の次の言葉はケルトの特色を, そしてワイルドの性質さえもよく語るものであろう。「ケルトの民族は〔劇的気質〕を持ち, 〔語り手〕〔演技者〕であり, 〔音楽と歌〕の才能を持つ」(Lady Wilde; *Ancient Legends, Mystic Charms and Superstitions of Ireland* 1887 [ ] は著者)。〔音楽と歌〕の才能をワイルドは豊かに持ち本質は詩人であり; 1875年の21歳から30種の雑誌に毎週のように作品を発表したことが出発である。またサンフランシスコの講演でワイルドはケルト民族の詩歌の伝統を誇り, 「ケルト民族の詩的天分は, 決して萎えることも衰えることもない」(*The Irish Poets of '48*, 1882) と述べている。そして「芸術は象徴である。人間が象徴であるから」と言っている。ワイルドの童話も短編も象徴的であるが, ケルト神話の物語の表現も, 象徴が重んじられている。〔劇的気質〕もワイルドの特色であり, 実人生ではさまざまな自己表現となって, “I put my genius into my life, but only my talent into my work” という良く知られた言葉にもそれは窺える。現実生活での〔演技者〕は自己芸術化というしてとみれば, ダンディズムに通ずるものであろう。アンドレ・ジイドは「無数のパラドックスを使い, 悪徳と贅沢を弁明する話に魅せられた」とワイルドの〔語り手〕としての巧みさを記録している。ワイルドは作品を書く前に, その物語を友人によく語っ

たといわれる。

筆による自己表現の手法としては逆説・諷刺・機知・至言などがあるが, これらはワイルド文学の特色である。こうした表現法は謎かけ(リドル)の伝統あるケルトの特色で, 神話や伝説の物語に多く見られ, 例えば「ディルモットとグラニーヤ」の物語で, 王フィンンの求婚の謎かけ問答には逆説がよく使われている。ワイルドは『ドリアン・グレイの肖像』でヘンリー卿を「逆説の王子<sup>プリンス・サーカス</sup>」と呼んでいる。逆説は逆手から本質をつく戦法であり, 「人生が芸術を模倣する」という表現を普通に使うワイルドは, またこうも言うのである。「私がこの世でもっとも愛するものは, 詩歌と逆説とが共に踊っていることだ」。

